

〔饅頭屋本節用集生不類〕鰯ブリ

〔書言字考節用集氣五形〕鰯ブリ ハナツ未 飯ハナツ未 順ハナツ未 和ハナツ未 鰯ブリ

〔日本釋名中魚〕魚師ブリ あぶらおほき魚なり、あぶらの上を略す、らとりと通す、

〔倭訓栞中編二十〕はりまち 和名抄に飯をよめり、今はまちといふものにや、塩囊抄にはまか記せり、

〔倭訓栞中編二十二〕ぶり 魚師をいふ、あぶりの義なるべし、ぶりやきとて別に製あるもの也、薩摩にてさうじといふ、蝦夷におそほろすけといふ、鰯をよむは二合の意にや、唐韻には鰯は老魚也と見えたり、

〔物類稱呼二物〕鰯ぶり この魚の小なる物を江戸にてわかなごと云、五畿内及西國四國にてわかなと云、又つばすと云、一尺程なるを、西國にて目白と云、一尺餘り二尺にも至るを、江戸にていなどと云、北陸道及奥州にてふくらぎといふ、關西にてはまちと云、漸大になりたるを、江戸にてわらさとよぶ、是を北陸道にてらぎといふ、霜月の頃三四尺五六尺となる、是則ぶりなり、薩摩にてそうじといふ、筑前、及上總にて大うをといふ、

〔日本山海名産圖會三〕鰯

鰯は日本の俗字なり、本草綱目に魚師といへるは、老魚又大魚の總稱なれば、其形を不釋○中日本にて鰯の字を制しは、即魚師を二合して、大に老たるの義に充たるに似たり、又ズリといふ訓も老魚の意を以て、年経りたるのフリによりて、ブリの魚といふを濁音に云習はせたるなるを、小なるをワカノコ、ツバノコ、メジロ、フクラキ、ハマチ、九州にては大魚とも稱するがゆへに、年始の祝詞に協かへる物ならし、

〔本朝食鑑八〕鰯音師、訓無利、